

IV-236

日本型リゾートの形態に関する
基礎的考察

(株)都市交通計画研究所 正会員 ○田名部 淳
京都大学工学研究科 正会員 佐佐木 綱
京都大学工学部 正会員 秋山 孝正

1. はじめに

いわゆるリゾート法が制定されてから、好調な経済活動を背景として全国各地においてリゾート開発が進められた。しかし、社会的な状況が変化した今日では、これらの開発によって生じた環境破壊等の、いわば「ひずみ」とでも表現されるさまざまな問題が指摘されている。

これらの現象は経済採算性を優先させた、画一的な大規模開発が原因になっているものも少なくない。現在生じている問題に対処するため、国土庁においてもリゾート法の見直し作業が進められている。

本研究では、既存研究¹⁾において地域の特性を活かし、都市住民に精神的な「ふるさと」を提供することを目的として提案された「ふるさと型リゾート」を取り上げる。この精神的な「ふるさと」の必要性を他分野の知見を援用することによって検証し、さらにその理念を明確化することにより、新しいリゾート形態を導出するための、基本的な要件を抽出することを目的とする。

2. 「ふるさと」空間の必要性

(1) 存在論的観点からの必要性

O.F.ホーラーは存在論的観点から、人間存在にとっての「故郷」の必要性について言及している²⁾。人間は自らの存在を脅かす外的な世界から身を守るための、「囲われた空間」を必要とする。すなわち、「世界がもはや威嚇的に不気味に対立することなく、同時に一少なくとも、ある領域とある範囲において一守護し、保護するもの²⁾」としての「ふるさと」空間が必要とされているのである。

(2) 日本の「ふるさと」の歴史的変遷

わが国における「ふるさと」という言葉の成立は古く、万葉集においてすでに使われている。しかしこの言葉がひろく共有化されるためには、広域的で多数の人の動きが必要とされる。すなわち明治時代

に入って、富国強兵政策の下で行われた近代化の課程で、その労働力が農村に求められ、故郷を離れて生活する人間が増加に従い、「ふるさと」がより一般的概念として認識されてきたと考えられる。

この時「故郷」として認識されるのは、自らが生まれ育った、固有名詞で語ることのできる個別・具体的な空間であり、その空間において存在する「地域共同体」である。

これらの「地域共同体」は農山漁村のみに存在するものではない。都市の内部でも江戸時代の五人組に端を発する隣組、あるいは長屋という住居形態に規定されて、同様の機能が果たされていたのである。

生まれ育った地域を離れて生活する者にとっては、距離を隔てながらも、「ふるさと」という生まれ育った場所、共同体が、自らのアイデンティティを与えてくれる存在であったのだ。

(3) 「ふるさと」をめぐる現在の状況

しかし、人間にアイデンティティを与えてきた地域共同体が解体されていくに従い、かつては一体であったアイデンティティが複数に分化されてきた。

このような傾向は職と住が分離していく過程において、顕著になってきたものである。かつては生活の全般にわたって、統一的な秩序をもって存在した地域共同体に代わって、何よりもまず企業がアイデンティティの源になったのである。

しかし、P.L.バウアー等が指摘するように近代における工業生産体制の下においては、個人のアイデンティティは匿名性を帯びる³⁾。つまり企業にとって一人の人間は、固有名詞で確認される存在ではなく、いつの時点においても代替可能なものとして規定されるのである。

このような曖昧なアイデンティティのみでは、人間存在が精神的な不安定さを避けることはほとんど不可能である。しかも、様々な私的領域におけるアイデンティティの存在は、複数の秩序が交錯する中で生活するこ

とを余儀なくする。そのために個人の内部に生じる軋轢は、精神的に非常に大きな負担となっている。

(4) 今後の趨勢

わが国では比較的強固な地縁の共同体と、「家」的な要素を含んだ企業システムの存在によって前述のような問題は顕在化してこなかった。しかし今後都市に生まれ育つ人間が増えるにしたがって、「ふるさと」空間を意図的に整備することが重要になると考えられる。

3. 「ふるさと」空間を特徴づける諸概念

次に人間が安息の中で暮らすために必要な「ふるさと」空間はいかなる特徴を有するかについて、先に引用したO.F.ホルナーを中心に整理する。

(1) 「愛着」、「住む」

「人間は本質上、『住む者』である。・・・人間はただ住むことによってのみ、存在する。」というボルノーの記述は、「ふるさと」空間の最も基本的な性質を表していると考えられる。

つまり「ふるさと」に住まうこととは、ある一定の場所を「愛着」をもって形態づけ、滞留することであるといえる。

(2) 「親密」、「風土」

以上において記述された「ふるさと」空間とは、いかなる性格のものであるかについて、ボルノーはシワフキーを引用することによって説明している。

「体験的な空間に囲まれて、人間的存在は、相互に向き合い、結ばれ、一致するのである。ここに親密がその居場所を見いだす。」

同じ場所に「愛着」を感じて本質的な意味で『住む者』を結び付けるのが、「親密」なる概念で表現されていると捉えることができる。

そしてこのような「親密」の性格を与えるものは「クリーム(気候・風土)」であるとされる。この場合「クリーム」は、自然条件だけでなく、その場所で育まれた文化体系まで含めて考える必要がある。

(3) 秩序づけられた空間

人間の存在が脅かされている原因の一つとして、統一的な人間の生の秩序の喪失を挙げることができる。これは分化されたアイデンティティに如実に示されている。ある空間における人間のふるまいを一意に規定する「秩序」は、「ふるさと」空間には不可欠な

概念であると考えられる。

4. 具体化にあたっての基本的要件

以上の考察において、「ふるさと」空間を特徴づける、「愛着」・「住む」・「親密」・「クリーム」・「秩序」が抽出された。

都市住民に対して精神的な「ふるさと」を提供することを目的とした「ふるさと型リゾート」の建設にあたっても、これらの諸概念を有機的に組み合わせることによって、本来の目的達成が可能になると考えられる。

利用者がリピート性をもってリゾート地域を訪れるためには、なによりもまずその土地に対する「愛着」が必要である。リゾート地域において提供される施設やサービスが他のもので代替可能である場合はこのような心的動きが働くことは想定しにくい。したがって地域に固有な「クリーム」、すなわち自然・文化・歴史を積極的に取り入れることが必要不可欠である。

さらにこのような「愛着」を共有することにより「親密」さが生み出されること、また特定の地域におけるふるまいを規制する統一的な「秩序」の必要性を考慮すれば、地域住民と利用者との間に円滑な交流が設定される必要がある。この場合、「秩序」はリゾート地域の共同体の規範を基調として設定すべきである。また利用者相互を結びつけるような交流を可能とするような施設構成を考えることが望ましい。これらは、地域の伝統行事などを組み込んだ定期的なイベントといったソフトとして提供することも効果的であると考えられる。

5. 今後の課題

既に事業化されている「ふるさと村」といった形態の「ふるさと型リゾート」への発展性を、具体的な事例研究を行うことにより考察し、本研究で示した要件について検証・補足することが必要である。

【参考文献】

- 1) 京都大学運輸交通計画研究室:(半)定住型リゾートに関する基礎的研究,1990
- 2) O.F.ホルナー著:実存主義克服の問題,未来社,1969
- 3) P.L.ハーカー他著:故郷喪失者たち,新曜社,1977